

Ⅱ 水産海洋研究会昭和43年度春季シンポジウム

『世界的規模における水産海洋研究発展の展望と将来』

共 催 水産海洋研究会
日本海洋学会

日 時 昭和43年4月6日午前9時30分～午後5時

場 所 東海区水産研究所

コンピナー 宇田 道隆 辻田 時美

日本の漁業開発の展望と将来 平沢 豊(東京水産大学)

最近におけるポピュレーション・ダイナミクス研究の発展と将来の問題

田中昌一(東大海洋研究所)

水質汚濁問題から

新田忠雄(東海区水産研究所)

栽培漁業の展望と将来

小笠原義光(東京水産大学)

日本周辺海域における資源環境研究の経緯と将来

辻田時美(北大水産学部)

カツオ漁業の展望とその将来

笠原康平(東北区水産研究所)

世界のカツオ・マグロ漁場開発の展望と将来

須田 明(遠洋水産研究所)

漁海況予報および通報の展望

平野敏行・本城康至(東海区水産研究所)

放射能問題から

谷井 潔(東海区水産研究所)

北大西洋、North Sea における水産海洋研究活動(ICESから)

宇田道隆(東海大学海洋学部)

1 日本の漁業開発の展望と将来

平沢 豊(東京水産大学)

1) 蛋白質需要の増大と海洋資源の開発

1967年はインド、パキスタン等で農産物が豊作となつたため、世界の食糧危機は一時的に小康を得ているが、これはあくまで一時的な現象であつて、長期的にみた場合は世界の食糧問題はより一層深刻なものになる。

世界人口は1960年では30億人であつたが、2000年には約60億になると推算されている。これは年率で1.8%の増加率であるが、東南アジア、アフリカ、南米等所謂後進国の多い地域では増加率は2.5%をこえ、中には3～3.5%に達する国も少なくない。

このように増大する人口に対して、世界の食糧生産が現状のままでは追いついていけないことが広く認識されてきており、特に、蛋白食品の生産については陸上では限界があり、海からの生